

2018. 6. 7 (木)

大学生よ、自主的な学習者であれ！

鳥羽美鈴

就活で問われる学び

ここにいる皆さんの多くは1年生や2年生かと思いますが、就職活動中の4年生にとってみれば、3月の企業エントリーに続いて、6月の今は企業の選考が本格的に開始された時期にあたるかと思います。低学年の皆さんにも今後関わることで、まずは企業選考という観点から、大学生とは何者であることが期待されているのかを考えてみたいと思います。

1、2年生の皆さんには、まだなじみのないものかと思いますが、エントリーシートおよび採用面接で最もよく聞かれる質問があります。何だと思いませんか。

——「大学であなたは何を学びましたか」という質問です。すなわち、大学生というのは社会から何を期待されているか。学ぶ主体であることが期待されているのが分かります。もう一つよく聞かれるのが、「あなたは学生時代、何に取り組みましたか」という質問です。この2つを考え合わせると、学ぶことが期待されているのは授業科目だけではなく、サークル、部活、あるいはアルバイトやボランティア活動などを通して、協調性を身に付けた、あるいはマイノリティーの立場から考えることの大切さが分かった、とい

ったことも学びとして含まれていることが分かります。

それにもかかわらず、4年生のゼミ生たちから、こんな相談が多く寄せられます。サークル、部活、アルバイト、ボランティア活動、どれもやらなかったのに、エントリーシートに書くことがない。あるいは、面白そうな授業をいろいろ選んで取ってきたけれども、それをどのように社会学部で学んだ内容としてまとめればよいのか分からない、といったものです。周囲の情報に流されて、楽に単位が取れると聞いた授業ばかり取ってきた学生は、文章をまとめるのにもっと苦労していますけれども。

社会全体の脱学校化

ここで少し専門的な話になりますが、紹介したい本があります。『脱学校の社会』、これに基づいて少し堅いお話をします。著者がイヴァン・イリッチといいまして、1926年にヨーロッパのオーストリアに生まれ、ニューヨークでカトリックの助任司祭も務めた思想家です。今日は表層的にチャペル講演に関連した部分だけを切り取ってお話ししますので、大学図書館などで後ほどじっくりと、自分自身で読んでもらいたいと思います。

脱学校というところが、かなり衝撃的なタイトルですが、決して社会からあらゆる種類の学校をなくそうと提案しているわけではありません。そうではなくて、教育だけではなく社会全体の脱学校化が必要だと提唱しているのです。それをもう少し分かりやすく言います。学校以外に場を移して、例えば人の生と死について考えてみましょう。今でこそ病院で生まれて病院で亡くなるという形が一般的であると思いますが、そういった制度が発達していない頃には、家で生まれて、亡くなる時も家で近親者に看取られるという形が多かったです。今は生も死も医師であったり葬儀屋であったり、そういった制度的な管理のもとに置かれています。

では教育はどうかというと、本来、学習というのは独学でもできるものですね。それにもかかわらず、皆さんはどうしてこうやって大学に来ているのか。最初に触れた就職の話に戻りますが、やはり大卒であったほうが就職には圧倒的に有利なのです。学習しましたと言っても、独学では社会的信用が得られない、教育制度を通して大卒という資格を得ることで評価される。そういった制度のあり方を彼は批判しています。

もう少し話を深めると、彼は学習を教科内容の消費と捉えます。そして教科内容というのは、奨励されたプログラムの結果であると言っています。先ほどゼミ生がエントリーシートや選考面接で、学んだことをどう説明したらよいか分からないと言っている話をしましたが、自分で面白そうだなと思う授業を選択したはずなのに、なぜまとめられないのか。それは、カリキュラムそのものが、制度化されたものであるからなのです。例えば社会学部であったら、文科省から社会学部で

はこのような授業を開講してくださいという決まりがあって開講されています。ですから皆さんは、興味のある科目を自分自身で選んだようであり、それは制度の一環であり、プログラムをこなしているにすぎません。社会学部生として必要な科目の単位をそろえているだけなのです。

そうなる必要となってくるのは何か。今日のテーマは「大学生とは何か？」でした。

———学ぶ主体であること。これが一つの答えになるのではなからうかと思います。学ぶといっても、主体的に学ぶ、おそらく自主的に学ぶ主体として期待されているのが大学生であろう。では、どうしたら主体的かつ自主的にになれるのか。

例えば授業で取り上げられる何か教材があるとします。古典作品の一部分など。授業内で学習して終わりにしてしまったら、ここには自主性は伴わないですね。そこで興味があるなと思ったら、図書館に足を運んでその作品全体を読んでみる。あるいは、教員が言うことを鵜呑みにするのではなく、それに対する反対意見がないか調べてみる。そこで初めて自主性をもって取り組むことが可能になります。

学ぶというのは、そもそも大学生でもなくとも、大学でもなくとも、できることです。けれども、皆さんはこうして大学で学ぶ貴重な機会を得ているわけですから、ぜひそれを活かしてもらいたいと思います。

最後に、伝えたい言葉

最近、公開講座で出会った一人の高齢者の学習者の言葉をお伝えして終わりたいと思い

ます。この男性は、多くの公開講座に参加されたようで、分厚いノートを作っていました。そこに公開講座で学んだことを毎回メモしているのですが、ただ聴講しているだけではなく、講演者に「良いご指摘ですね」と言われるほどの良いコメントや質問をしています。つまり彼は、自主的にそれに参加しているのです。一日限りの公開講座ですから、カリキュラムづけられたものではない、与えられたものではないけれども、自ら講座の情報を探して各会場に足を運び、そしてまた積極的に質問をして関与しているわけです。

その方は次のように語られました。「こうして退職して時間ができた今になって、学ぶ楽しさを感じるようになりました。けれども、身近にたくさんの本があって、すぐに質問に答えてくれる教員がいる、そういう大学生の時代に、もっと学んでおけばよかったなと思っています」と。ぜひ若者に伝えてほしいとおっしゃっていましたので、こうして皆さんに伝えさせていただきます。皆さんはどうぞ自主的な学習者であってください。

(社会学部教授)